

## 自然公園における自然とのふれあいの推進～ビジターセンターを中心として～

(懇談会事務局による中間整理表)

### 【前提】

- 近年、自然とのふれあいを求める国民のニーズが高まるとともに、多様化、高度化する傾向。
- 様々な主体が様々な場面で自然とのふれあい活動を展開する中で、自然公園は最も豊かな自然とのふれあいを実現できるフィールドとして貴重であり、他のモデルとしての責任。
- ビジターセンターについては、ハード面の整備に比べ、的確な情報、活動プログラムの提供、それらを支える人的基盤などソフト面の整備の遅れが顕著。また、地元依存型の管理運営体制の限界。

分類	テーマ	方針
理念 (目的)	・自然公園と自然とのふれあい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然公園が果たすべき役割として自然とのふれあいは重要な柱の一つとして認識。</li> <li>・広範な自然とのふれあいの概念を踏まえ、持続可能な範囲内での自然とのふれあいを促進するため、自然公園におけるハード面の整備と併せソフト施策の充実を図り、適切に誘導する必要。</li> </ul>
	・ビジターセンターの役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特に、ビジターセンターについては、自然公園における自然とのふれあい活動の中核としての位置付けを再確認し、整備を推進。</li> <li>・公園の利用情報の提供に加え、自然体験や環境学習の機会の提供など、ビジターセンターを中心に国立公園における自然とのふれあい施策の拡充が必要。</li> </ul>
計画論	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域特性、利用実態の的確な把握</li> <li>・ニーズを踏まえた整備方針の策定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジターセンターに求められる機能が多様化する中で、公園の特徴、立地の特性、利用の実態等を踏まえ、個々のビジターセンターにおける機能の重点化の必要性や独自性のある情報提供のあり方を検討する必要。</li> <li>・その際、安全面、身障者や外国人利用者へも十分配慮。</li> <li>・また、既存施設との連携、役割分担に十分留意するとともに、利用者への普及啓発効果も考慮して環境配慮型施設への改良を推進。</li> </ul>
利用ソフト論	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生きた情報の収集提供</li> <li>・魅力ある活動プログラムの開発提供</li> <li>・普及啓発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各ビジターセンターにおけるホームページ開設による事前の情報提供やリアルタイム情報の収集提供を促進、ビジターセンター相互間や類似施設などとのネットワーク化による情報共有を検討。</li> <li>・活動プログラムに質の高さと新鮮味を求める利用者層に応え、有料プログラムを開発、提供。</li> <li>・活動の場のゾーニングとともに、キャパシティに留意が必要。</li> <li>・ビジターセンター活動を積極的にPRするため、観光情報とのリンクや個々のビジターセンターの役割に応じた呼び名を検討。</li> </ul>
管理運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・有能な人材の確保育成</li> <li>・管理運営体制の整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然保護官とともにビジターセンター活動全般やボランティア活動を調整し、多様な来館者への的確な対応、質の高い多様な活動プログラムを提供する人材の確保育成が重要。</li> <li>・このため、官民の役割分担に留意しつつ、自然学校など専門家との連携、協力とともに、民間の自立を支援する方策を検討する必要。</li> <li>・そのための財政基盤の強化を目指し、様々な形で地域や関係者との連携の確保とともに、受益者負担の導入、管理運営費の拡充などに努める必要。</li> </ul>

### 【方針の具体化】

上記方針を踏まえ、例えば、サロベツ地域（利尻礼文サロベツ国立公園）においては、自然再生事業のモニタリング、地域の歴史・産業を含む総合的な環境学習機能を有するビジターセンターを整備、運営するなど、自然とのふれあい施策を推進。